

空



2007年

SORA 19号

晴夜 (19) | 2

柴田 佐知子

火柱となりし殉教黍嵐

地獄絵にもつとも遠く雲の峰

青栗に深き谷底ありにけり

箱眼鏡覗くこの世に誰もぬ

村が守る岩隆々と御祭風

帯低くついてゆくなり宵まつり

鶏が勝手に鳴いて茄子の花

月の出や守宮は我に指ひらき

天の幕

服部 早苗

春の野や象形文字に人や馬

飲食の湯が沸きにけり桜どき

セラピーの馬の双眸みどりの日

青胡桃擬音語ばかり言ふ子かな

川筋をまつすぐゆけと柿の花

箱詰の枇杷にひよこの生まれさう



天道虫だましと坐る昼休

まくなぎの右によければ右に寄る

金魚田の夜は紺色の天の幕

金魚田に隣る水口きらきらと

くねくねと日暮のながき螢川

栄養学黴の話に及びけり

ひたひたと鉄棒灼くる夏休

西日負ふ火焰光背負ふごとく

にぎやかにリボン飛ばして扇風機

誘蛾灯

青山 悠

岩を越す水の白煙洗鯉

霊山を踏まへて立ちぬ雲の峰

滝しぶき願文密に目の薬師

夏蕨たれも採らない古墳みち

炎昼やそこ退けのけと消防車

誘蛾灯たましひ灯るあはさなり



仙人掌の闇震はせてひらき初む

蛍火や逢うて別れてそれつきり

潮の香や小蟹の走る遥拝処

伴走は担任教師子供山笠

山笠の子に暁の勢ひ水

単帯むすんでもらふ花火の夜

魂抜きの石ごろごとと蚊喰鳥

勤行のこゑ白萩のあたりまで

頭陀袋かけてすなはち秋遍路

噴水

秋 千晴

夏空に炭鋤王の鬼瓦
木洩れ日の小さくなつて梅太る
蛇の衣なんとなくまだ動きある
筋道の通らぬ事の酷暑かな
羅のうなじ楽屋へくぐりけり
枳席の欄干に腕ソーダ水



揺るる度増えてゆくなり小判草

噴水の前で長々待たさるる

再会を喜び合へる夏料理

雨傘の重なり合うて睡蓮池

草抜けば茎よりも根の長々と

脱皮終へすぐに加はる蝉時雨

花切れば蚊のあわてたり我もまた

井戸水に胡瓜の棘のさらに張る

いらぬ物捨てたる母の涼しさよ

退

屈

あさなが捷

正論と切り捨てられし団扇かな

悔いのない恋をせりとて海月浮く

梅雨晴れの水のかたちに棚田かな

地の果てより迫りくる麦畑

恐ろしき小父さんもみて端居かな

炎天の地球廻して観覧車



本当のこと言ひ出せぬ暑さかな

通る人眺むるのみの夕端居

うは言のやうに暑いをくり返す

もう会へぬ闇となりたる蚊遣の香

蚊を打ちてひとりの夜となりにけり

焼茄子の煙の匂ひ子と呼ぶ声

今日もまた家には居らぬ帰省の子

西瓜提げ父せはしなく戻りけり

退屈な殻より栗の弾けたる